

長い落胆が、タツちゃんの間を大きく歪めていた。どういうわけだろう？ 気がついた時、タツちゃんは、あのスエンと出会った穴の中にいた。

何をどうしたらいいのか、何もわからなくなって、街をさまよいき、ただどうしようもない答えを探して、無意識にフタタビ山に登り、そこから見えた、あの工場にフラリとやって来たのではなかったか？ なぜここにいるかの答えを求めらるなら、それしかあり得ないはずだった。でも、タツちゃんには、その記憶すらなかった。

「僕は単なる地球人なんだよ。」

そんな虚しい思いしか湧いてこなかった。進んだ科学力があるわけでもない。宇宙に飛び出して行けるわけでもない。ましてや、人の意識を操作するなんてことも出来るわけがないし、仲間みんなに「操られるらるるんだ！ 目を覚ませ！」と言ったところで、奇異な目で見られるくらいが関の山だった。

何もできない。どうしようもない事だった。

そんな事は分かっている。分かっているからこそ、どうにかならぬのかと途方に暮れていたのだ。

「なぜにここへと参ったか？」と少女のような古老のような声がした。スエンがそこにいた。

「何やら不穏な動きがあったようじゃの。グウアリエンを脱退してからは世情には疎うなつたが。」

タツちゃんは、スエンを見たが返事すらしなかった。

「ふむ。ずいぶんと打ちひしがれておるようじゃな。いつも自分の調子を外さぬお主らしゅうもないではないか。」

スエンの声には、宇宙の終りを引き延ばし、自分たちの星の消滅を防ぐために、多大な労苦を引き受けていた時の重々しさはなくなっていた。

その軽さが、少しタツちゃんの気持ちをも軽くした。どんな事が起きたのかを、タツちゃんはスエンにポツポツと話し始めた。

「ふむ。委細承知した。」

スエンは、タツちゃんをじっと見つめて問いかけた。

「して、お主、いかようにしたいのじゃ？」

「いかようにって。どうしたらいいのかわからないよ。」

「望みはないと申すか？」

「望みはあるさ。みんながまた戻って来てくれて、楽しくできれば一番だよ。」

「ふむ。ならば、道は、無くもなからう。」

「え？ なんとかなるの。」

「タツちゃんのスエンの想像外に軽い応対に驚いてしまった。」

「よいか？ お主を救世主にするたくらみは、潰えたのじゃ。」

「うん。」

「ならば、お主の身のうちの者共を、呼び戻したとて、なんの遺漏があるう。」

「あ……。確かに。でも、ニセ宙公は帰っちゃったよ？」

「用が無くなれば帰るであらうな。しかし、何らかの命あらば、それはまた別の話。」

「別の命って何？」

「より目上の者が、命令を出せば、監察官は動くものじゃ。」

「目上って、もつと偉い人って事？ それ、スエンが頼んでくれるの？」

「いや、それは、かなわぬ願い。グウアリエンを抜けてしもうた我がスアミイ族には無縁の役目じゃ。しかし、」

「しかし、何？」

「お主が直談判に出向くのなら、話はまた別であらう。」

「ぼ、僕？ 僕はそんなにえらくないよ。」

「偉くはなからうとも、迷惑を被ったと願うて出るは許されようぞ。」

「迷惑は被ったよ。確かに。」

「その、怒りの訴え、本心より出来るか？」

スエンは真剣な眼差しで、タツちゃんの目を見据えた。瞳が静かな湖水のようで、キツネのような顔立ちとあいまって、身が引き締まる気がした。

「タツちゃんは一呼吸して、」

「言いたいことなら山ほどあるさっ！！」

「と思いを言葉にした。その声は自分で思っているより、かなり強く大きく、自分でも驚くほどだった。」

「ならば、訴主としての資格は充分じゃ。その思い、グウアリエンの長、グエラ大王様に直接伝えるが良からう。」

「直接？ 直接ってどういう事？」

「お主が、グウアリエンまで行くということじゃ。」

「え？ 行けるの？ あ、そうか、スアミイの時間と空間の道を通しにくれるんだね。」

「そうしてやりたいのは山々じゃが、そうはいかん。空間をつなぐ道は、宇宙の掟で厳しく制限されておってな。グウアリエンに加入す

らしておらぬそなたを通すわけにはいかぬのじゃ。なにより空間転移に、そなたの体が耐えられるかどうか計り知れぬ。」

「じゃあ、どうするの。」

「うむ。本来は宇宙旅客通行規定に抵触しかねぬのじゃが、お主は既にグウアリエレンの監察官と接触しておる身ゆえ、このキカイを手渡すくらいなら許されるであらう。」

と、スエンは小さな輝く不思議な機械をタツちゃんに手渡した。手のひらに乗る程度の大きさだが、少し重みがあり、見た事もない素材で作られていた。三方に飛び出した瓶の口のようなものが出ていた。

「なに、これ。」

「グウアリエレンのキカイの技術というものは、好きになれぬでな、よう説明はできません。じゃが、この道具だけは、なに、なかなかよう出来ておつてな。気に入っておるのじゃ。気に入つてはおるのじゃが、この笛は、今ここで落としてもうた事にしようぞ。」

「笛なの？ なにそれ。これでどうしたらいいのさ。」

「落としてもうたモノの事をそうそう説明はできません。お主はたまに吹いてみたという事にしておくが良いぞ。」

「ヨナサキって、すぐそこの浜辺じゃん。そこに行けばいいの？」

「さあもう。どうだかのう。じゃがお主はそこで、この星の暫定代表に会えようぞ。」

「暫定代表？ なにそれ。」

「これ以上は言えぬ。じゃが、それはお主も、よう知つとる相手じゃ。心配はいらぬわ。ふふふふ。」

スアミイ族の中心であるスエンは、そこで不思議な笑いをした。スエンはこんないたずらっ子のような笑い方をするんだと、タツちゃんは妙なところに感心していた。

■ 2

ヨナサキの浜は波音だけが大きく響いていて、なんだか少しタツちゃんには怖い気持ちになっていた。夜の海は、人を飲み込んでしまいうような凄味がある。

「僕のせいで、みんなの人生が無茶苦茶になっちゃうなんて、たまらないよ。」

そうつぶやいてしまったのは、終わらない波の音のせいだったかもしれない。

「人目につかぬよう、夜に出かけた方が良からう」とスエンは言っていたけれど、いったい何が起るのだろう？

スエンから手渡された「笛」をタツちゃんはポケットから出した。

「願いを込めて吹くのじゃ。そうせねば、その笛は役目を果たさんでな。」とスエンは言った。三つの瓶の口の真ん中の一つを啜えて、タツちゃんは心から願った。

「僕の友達が本当に自分らしく生きられるようにしてください。誰かの声に踊らされる事なく。心の内の洗脳に侵されないように。」

あらためてそうつぶやくと、たまらない気持ちが出て、あやうく、また泣いてしまっただった。

と、突然、タツちゃんの頭の中に、ヨナサキの浜辺で泣きそうになっている自分自身の映像がハッキリと見えた。

「え？ カメラでもあるの？」

と思ったタツちゃんは、頭の中のシーンを映し出している「カメラ」の存在を探した。それは、どう考えても、海の側から見た映像だった。あまりに鮮明なのでおどろいたのだった。

船でもあるのか？ と思った先には何もなかった。ただ、じっと見ていると、その方向から小さな「クカカカカカ」という鳴き声が聞こえて来た。

「え？ イルカ？」

と思う間もなく、頭の中に、声が響いて来た。

「シュエルテンで呼び出しをしたのは、あなたですか？」

間違いない、あのイルカがしゃべっているのだ。と言う事は、「よく知っている相手」というのは……

「リヒテン？」

☆ ☆ ☆

「リヒテンシュタインというのはこの星にある、二重内陸国の事なのですよ。」

というような「意味」がストレートに飛び込んで来た。リヒテンが「シュエルテン」と呼んだ笛には、そんな通信機能があった。笛と言うよりは、翻訳機に近い道具のようだ。

「二重内陸国？」

タツちゃんはリヒテンにつかまりながら、水の中に入って、夜の海を沖へと向っていた。願いをかなえるためには、海に入り、出かけなければならぬというイメージがタツちゃんにもつたわり、ためらいもせずに海に入って、すでに数分が過ぎていた。

内陸国とは、海のない国の事であり、二重内陸国とは、そういう海のない国に囲まれ、海に出るまでに二度、国境を超えなければならぬ国の事だと、シュエルテンから伝わるイメージは言っていた。

「この星がいかに辺境にあるか、宇宙の構造がどうなっているかをルイさんにお伝えしよう」とずっと叫んでいたんです。あの人は感性の鋭

い人でしたから。でもどう言う事かそのイメージは、少し歪んで二重内陸国のイメージとなつて、私がリヒテンシュタインという名前で呼ばれるようになってしまつたんですよ。」

「なんでそんなに話しかけなきゃならなかつたの？」

「人類に、この星の代表者になつて欲しかつたからですよ。」

「どういうこと？」

「河連、銀河連邦は宇宙の星の一つ一つに代表種族を決めています。たいていはその星の最もメジャーな種族が代表で、地球なら、まず人類が代表になるのが順当です。」

「あー、そうなんだ。」

「しかし、残念ながら今の人類は宇宙に代表として立てるだけの、宇宙の知識も持たず、人格の完成度も足りないのです。だから河連は、人類が地球の代表として成長するまでの間、我ら海洋族を暫定的に代表と定めたのです。」

「君達イルカ族が宇宙の代表だったの？」

「まあ、そんなところですね。イルカ族だけというわけではありませんせんが……。潜りますよ。」

と、リヒテンからのイメージが潜水するイメージを伝えて来た。

「シュエルテンをすっかり啜えてください。」と注意が飛んだ。

次の瞬間、顔の周りに透明なカバーが張り付いて、マスクの機能を果たした。水に潜っても息は苦しくなかつた。

「シュエルテンは簡易タイプの異文化交流ツールです。交信機であり、翻訳機であり、宇宙服にもなります。身体が濡れてないのが分かりますか。」

と、リヒテンが伝えて来た。水が冷たかつたので気が付かなかつたが、確かに服は濡れていないらしい。

「でも、何処に行くの？ 僕が行きたいのは、空の上、よその銀河だと思ふんだけど。」

「宇宙に行くなら、上に行く。そんな単純な事しか考えられないから、人類はまだまだグウアリレンへの参加権も得られないのです。」

いくら北海道が北にあつても、最寄駅が東にあるなら、まず東に向かつて歩く以外に道はないのです。」

どこかの島にロケット基地でもあるのか？ とタツちゃんは思ったが、リヒテンの答えは、その想像を超えていた。

「宇宙にはいくつもの空間の歪みがあるのです。地球にあるもつとも大きく宇宙とのつながりが大きい歪みは、この海の底にあるんですよ。我々のような海洋種族が地球の暫定代表なのも、そういう理由があるのです。」

「空間の歪み？ それって、スアミイ達が掘ってる穴とおなじもの？」

「いえ、スアミイの皆様ののように、自分達で掘った訳ではありませんよ。自然に出来た宇宙の通り道です。そろそろ見えてくるはずですよ。あれです。」

と、リヒテンの意識が指し示した方向には、小さな光が見えた。その途端、真つ暗な海底が明るく照らされたようにハッキリと見えた。シユエルテンが光を見ようとした僕の意思を受け取って、海底のわずかな光を増幅して僕の視覚に送りこみ、僕の視神経も人為的に感度を高める事で、海底の様子がよく見えるのだと、リヒテンの意識が伝えて来た。

海底の光は大きく、吸いこまれていくような感覚があった。「入りますよ」とリヒテンが促す。タツちゃんたちは、光の渦に取り囲まれた。

3

光の流れの中にタツちゃんは投げ出された。まぶしくて何がなんだかよく分からない。

「もうシユエルテンは、いりませんよ。」というリヒテンの意識が流れた。口からシユエルテンを外してみると、確かに息ができた。でも、リヒテンは今までと同じように、タツちゃんの下で泳いでいるようだ。目が慣れてきて、あたりを見回すと、遠くにいろいろな姿をした宇宙人らしき存在が空間に漂うように、ポツリ、ポツリと行き交っていた。そしてそこには、風景らしき風景というものが存在していなかった。ただ、暖かい光りだけが当たりを包んでいるようだった。

「ここは？」

「空間の歪み、ヨウトの峡谷です。許された旅人だけが使う特別の関門です。」

「いま、僕たちは海の中にいるの？ それとも空を飛んでるの？」

「どちらでもありませんね。どう言えば良いでしょうか？ 海でも空でもない空間です。われわれは、空気と水の子供、『クウズの波』と呼んでいますね。宇宙空間が元もと持っている自然の通路です。」

クウズ。確かに、空気が身体にまとわりつくように重い。しかも、川の流れのように、クウズも一定の方向に流れているようだった。息を吸い込むと、何か懐かしくてさわやかな思いが湧いてきた。

「もっと深く深呼吸してみてください。」とリヒテンが言う。

思い切って粘着質の空気を深々と肺の中に入ると、意識の中に、この通路を通ったもの達のさまざまな思いが瞬間的に蓄積された。

「この空間の中には時間も折りたたまれていて瞬時に蓄積された。かれしているクウズの波の中で、それぞれの場所にそこを通った旅人たちの歴史が刻まれています。」

タツちゃんは地球のそば、太陽系からアンドロメダにかけての宇宙の歴史を完全には理解できないまでも、大きなイメージとして身体の中に取り込み、その喜びと悲しみを意識として共有していた。

「その歴史はクウズの流れの場所ごとに違い、それらが流れ流れて、ひとつの伝説に集約されているのです。スアミイの皆様方がお使いになる阿頼耶識の岬は、宇宙中のクウズの流れが集まる場所であり、もつとも古い言い伝えが、いくつも編み込まれて、おおらかなイメージとして空間に記憶されているのです。」

「それが、救世主伝説ってこと？」

「そうです。もしかしたら、あなたの事かも知れない物語です。」
その答えを聞きながら、タツちゃんは、ヨウトの峡谷の「物語」を肺の中へと導いていた。一息ごとに、何億年もの宇宙空間の歴史が、タツちゃんの体の中に入っていく。

その内容は、何十巻もの絵巻物を見たような豪華絢爛さであり、何百という種族の栄枯盛衰が、個別の人生の笑いと涙をしっかりと感じ取るほどの緻密さ豊かさで伝わってくるものだった。

その圧倒的な情報の濃さに、タツちゃんは心を押しつぶされそうになりながらも、その壮大で愛おしい物語に涙を流して感動していた。

「ヨウトの峡谷は、阿頼耶識の岬に比べれば、ほんの小さな記憶の流れでしかありません。阿頼耶識の岬の物語は、それはそれは内容の濃いものだそうですよ。」トリヒテンは言う。

その時、明るさの空間に、大きな影が現れた。リヒテンの意識がささやいた。

「私とは違う、もう一つの地球の暫定代表種族が来ましたよ。」トリヒテンの意識が、その大きな「影」の方向を示した。

そこにいたのは、大きなシロナガスクジラだった。

「私がリヒテンシュタインなら、『彼はそのうちウズベキスタンと呼ばれることになるのじゃ』と、スエンさまは言っておられました。が、トリヒテンがよくわからないけれど、彼の事はそう呼べば良いのだ、という感情を伝えてきた。スエンによれば、ウズベキスタンという国が、地球のもうひとつの二重内陸国になるらしい。」

「さて、ここからは、流れが速くなります。意識に流れ込んでくるこの物語も、あまりに複雑で膨大になりすぎる。クウズの旅が初めてのあなたには負荷が大きすぎるでしょうから、彼の口の中に入れてください。」

クジラのウズベクはゆったりと流れとは反対の向きに体の位置を変え、流れの先に尻尾を回して、タツちゃんとリヒテンの前に顔を出した。大きく開かれたウズベクの口に、タツちゃんが入っていた。ウズベクはふたたび方向転換をして、体を流れにまかせて漂った。「ここからのスピードは尋常ではありませんからね。」トリヒテンが

ウズベクの外から伝える。

「もしかして、光より早いのか？」

「もちろん。あなたが気にしているのは、『光が宇宙で一番速い』という学説の事ですね？」

「うん。」

「目の前の現実には、つねに机上の論理を越えているものです。真実の宇宙は、もっと豊かな可能性に満ちているものです。先に限界を決めてしまう理屈は、あまり信用なされない方が良いのではないですか？」

「さあ、流れに入りますよ。」

「タツちゃんは少し怖くなって、」

「滝みたいに落ちる感じ？」とリヒテンに聞いてみた。

「宇宙に上下の区別はありませんからね。落ちているのか、昇っているのか、ただ流されているだけなのか。どうとらえようと、それは、あなたの自由意志にまかされているのです。」

「タツちゃんを口に含んで、ウズベキスタンとリヒテンシュタインは光の大関門の中に飲み込まれていった。」

■ 4

グウアリエレンの会議場は、王の間でもあった。宇宙滅「虚無の闇」の活動が激しくなつて以来、全宇宙の重要事項の緊急決定が必要となり、いつの間にか王の間こそが議決の場になってしまったのだ。全宇宙の代表者が集まる王の間は、広すぎるコロシラムのようになっていた。その広場の中央の演説台に、ヨーロッパ人特有の銀色の肌に、金色の大きな目を持った宇宙人がひとり、答弁者として立っていた。

「かの救世主伝説は、その信頼を失ったと、いまユゲンゾ族のツイク殿はおっしゃった。しかし、スアミイの方々によれば、阿頼耶識の岬は、もつとも宇宙の物語が数多く集まるところ。あの伝説そのものが間違いだつたとするのは、あまりに性急ではありませぬか。」

と、グエラ大王の最も良く切れる懐刀と呼ばれる左大臣ユンプは今一度救世主伝説の信用性を担保しようとしていた。

「お待ちください、左大臣殿。その伝説の継承者とも言えるスアミイの方々によって、救世主候補は御光りの儀式を受けたのです。最も適正に儀式は執り行われたはず。にもかかわらず、滅を払う、『大いなる光り』は現れなかった。これが何よりの証拠。もう、『救世主伝説を実現する』という目的は失われたのです。」

「反対質問を投げかけているのはトカゲのような表皮と、左右に二本ずつの腕を持った異形の宇宙人だつた。どうやら、この質問者がユゲンゾ族のツイプクであるらしい。」

「左大臣殿はグウアリイレンの論理的整合性を担当される最重要職。お立場上、性急な判断をお避けになるのも分からぬでもありませんが、ユゲンゾ族の48の分家を代表してこの会議に参加している私としては、もう、待つことはかえません。我らが所有する由緒正しき『意識の道』を、いつまでも救援通路などという名目で、グウアリイレンに差し出し続けることは、出来ぬ相談です。」

トカゲ肌の宇宙人は、銀色の肌をした左大臣に、グウアリイレンからの脱退を願っているのだった。

「宇宙滅の被害を抑える新人類戦士の中から、新たなる救世主が誕生する。それが阿頼耶識の岬に残る、もつとも古い言い伝え。だからこそ我々も、『滅を払う金色の光』の誕生に賭け、『意識の道』を供出していたのです。しかし、伝説そのものが達成されなかつたいま、我ら弱小種族が新人類戦士や宇宙船の移動をまかなう理由はござらん。ましてやあのスアミイのステン様がグウアリイレンから脱退されておられるのです。我々の微細な力で、グウアリイレンに、どのような貢献ができると言うのですか。救世主伝説はまやかしだった。我々はもう打つ術がなくなつたのです。」

「ツイプク殿。待たれよ。まだ救世主伝説が誤りだったと判断するのは早すぎますぞ。まだまだ新人類戦士は宇宙中におります。確かに、噂によれば救世主候補であつた地球の者は、かなり大きな力を宿していたらしい。それでも彼は、もともと新人類戦士としての検分にも通ることが叶わなかつたということをご存じか？」

と、銀肌の左大臣が言うのと、ユゲンゾ族・トカゲ肌のツイプクの顔色が変わった。

「な、なんですか？ あの救世主候補、地球のものは、新人類のゲートをくぐらぬまま御光りの儀式を受けたと言うのですか？ そんな、馬鹿な。」

衝撃的な事実の公表に、会議場全体がざわざわとどよめいた。「あまりに手順が違ふ」という驚きの声だった。なぜ、「岬の物語」を無視してまで、あのスアミイ族が儀式を急いだのか？ それなりの理由があるのやも知れない。そして、物語を無視した強制儀式であるなら、それは条件が整わず、救世主はこれから現れてくるということかも知れない。

いや、あるいは、スアミイの儀式の強制執行によって、生まれるべき救世主が救世主になりそこねてしまったのかも知れない。会議場はとどまるところを知らないざわめきの中に包まれた。誰もが勝手に、自分たちの思いをつぶやいていた。

「静粛に！ 静粛に！」

議事進行係らしき宇宙人が意識通信を使った拡声器で、参加者たちの意識の中に直接語りかけた。瞬間、どよめきが収まる。体中にイレ

ズミを入れる習俗があるヒョウラス人のウーラが議長だった。このイレズミ議長は、みなを黙らせるためにも、無理にも言葉を続けた。「ユゲンゾ族ツイプク殿のご意見に対するご答弁を左大臣から賜りました。では、政務担当の右大臣のご意見もご確認したい。右大臣は、この件、どう思われておいでですか？」

グウアリエレンの運営は論理の左大臣、実務の右大臣という役割分担で執行されていた。イレズミ議長の進行は、そのルールに則ったものだった。

意見を求められた左大臣は、他の宇宙人の数倍はあろうかという巨躯を揺らして、座り直した。その顔はまるでアライクイのように長く、ゴツゴツした象のような表皮には、長年の経験を示す深いシワがいくつも刻まれていた。

「スアミイの岬の物語は、あの場に出かけなければ読むことはできません。もともと他星のものが立ち入る事が禁じられている場所ゆえ、どういう想いが綴られていて、儀式につながる手順がどうなっているのか、それはスアミイの方々には分からぬ事。推測では何も判断ができません。どうか。となれば、我々が行えることは……。」

と、アライクイ顔の右大臣が話し始めたとき、緊急連絡の意識通信が参加しているすべての代表者の頭の中で鳴り響いた。

「みなさまに緊急の連絡がございます。いま、光の大関門を通じて、地球の、あの、救世の方がお越しでございます。」

「なに？ あの『タッチャン』というお方か？」とアライクイ顔の右大臣が問いかける。

「そのようでございます。暫定代表の方お二方と一緒に見えです。」

それを聞くと、右大臣はすぐに次の指示を出した。

「意識の門を、いまずぐ、この会議場に設置しなさい。この場にお迎えるのだ。」

その指示に従って、高い空中から巨大な鏡のような装置が静かに舞い降りてきた。

会議場は、話題の主が登場するという意外な展開に、なりゆきを息を潜めて見守っていた。

■ 5

光の大関門はとても広く、大きく、長く、そしてその中の航行はとてもゆっくりとしたものだった。あまりに大きなクイズの流れのため、その中にいる自分たちは速度を感じることができないようだった。地球が高速で回転しているにも関わらず、川辺で寝っ転がっていたら、のんびりとした雲の流れしか見えないのと同じように。

「そろそろ着きますよ。あの遠くに見える四角い窓のむこうが王の間です。」とリヒテンの意識が伝えた。タツちゃんがウズベクの口の隙間から外を覗くと、はるか遠くに、四角い「窓」が見えた。

その少し暗い色の窓を眺めながら、タツちゃんはこの数日：なのか数ヶ月なのか、あるいはたった数時間のことだったのかもわからないが、リヒテンから学んだことを復習していた。

宇宙の掟は、ひとつひとつの生命体すべてに適用されること、宇宙の広さは人間の想定しているものよりもっと広いこと、個別の星が持つ空間の歪みから成る「道」は地球上の「領海」のようなもので、簡単に侵犯できないこと、それでも意識通信による入星はある程度自由認められていること、しかし宇宙滅の拡大を食い止めるためには肉体を持つ「新人類戦士」が必要で、タツちゃんはその資格試験に落ちたということ、そして救世主は新人類から生まれるという言い伝えがあるということなどだった。

「領海侵犯をしないためには、それぞれの星に生まれた人間の身体に意識通信で入り込み、救助隊の戦士として働く必要があるのです。それが命を救うということですよ。」とリヒテンはあっさり言った。

「でも宙公はそんなこと全然教えてくれなかったよ。」
「それは当然です。彼らには監察官としての守秘義務がありますからね。ぺらぺらしゃべるわけにはいかない。」

「そういうものなんだ。」
「とにかく、王と謁見したら、自信を持って対等に話すことです。宇宙法においては王もあなたも同格です。そしてもっとも大切なことは、あなた自身の思いを、いかにしっかりとつかまえておくか、です。たとえ周りから悪し様に言われてもね。そう、あのレビンのように。」

「レビンって何？」
「王族警護隊の隊長ですよ。ある星の大多数の命を救ったというのに、最近では『月落としの悪魔』と罵られることの方がはるかに多い。宇宙の広さというものは、そのようにまっすぐな想いを歪めて伝えてしまうものなのです。」

「可哀想だね」
「そうですね？ やるべきことをやったのだから、当人は意外にすつきりしているかも知れませんよ。お話したことはないのですが、ありませんが。ともあれ、グエラ大王は良い方です。信じて自分の確かな想いを伝えれば、それですべてうまく行きますよ。」

「そんな話をして、四角い窓はどんどん近づいてきた。その「窓」は、通る者のサイズに合わせて自由に伸び縮みするようだった。到着する場所を誘導するかのよう移動しながら、シロナガスクジラのウズベクがちょうど通りやすい位置と形に「窓」は縮んでいっ

た。「窓」の表面が水面のように波打っている。

ウズベクが、その水面を突き抜けると、大量のクーズが「窓」からあふれ、王の間へとウズベクの身体は投げ出された。あふれたクーズは飛び散ることも床に落ちることもなく、ゆったりとウズベクの身体のみまわりにまとわりついていていた。

「着きましたよ。」

ウズベクとともに光の大関門を泳いでいたリヒテンもクウズの中に漂いながら、タツちゃんに到着を知らせた。ウズベクの口が少し開いてタツちゃんは王の間に降り立った。

そこはあまりに広い場所だった。タツちゃんから見れば、まるで荒野にぼつんと立たされたような気持ちだった。地球人の感覚では、その王の間の端になるべき、壁の位置が認識できなかった。あまりにそれは遠かったのだ。しかし、目をこらして良く見れば、遠い遠い所に、全宇宙の宇宙人代表が恐ろしいほどの数で陣取って座っていると、いう事がなんとなくわかった。個別の人がわかったわけではない。たぶんリヒテンがイメージを意識として伝えてくれているのだろう。

タツちゃんから、おそらく数十メートルは離れているであろう場所に、大きなカーテンのような布地のオブジェがあり、それはこの王の間の天井にも届きそうなほど大きかった。タツちゃんには、オブジェの頂上も見えなかった。

そのカーテンの前に、アrikイの顔をしたような宇宙人が立っていた。ずいぶん遠くであるはずなのに、姿形がわかる。距離感が狂うけれど、おそらくかなりの巨体なのだろうとタツちゃんは想像する。いや、リヒテンの「解説意識」なのか？ それすらも、もう区別がつかなくなっていた。同じように、少し離れた位置に銀色の肌をした宇宙人らしい宇宙人もいた。

タツちゃんは、誰に何を言えばいいのかもわからず、そのアrikイのような顔をされた宇宙人に向かって大声で言った。

「僕の友達を返してください！」

その主張はあまりに唐突だった。しかし、タツちゃんに取って言いたいことはそれだけだ。アrikイ顔の宇宙人が、噂に聞くグエラ大王なのだろうか？ リヒテンの意識は違うと言っていたが、そんなことはどうでも良かった。大切な友達が、また大学に戻ってきて、同じ人生と一緒に歩むことができれば、それでいいのだ。そういうときさえ、この大きな大きな、大きすぎる「裁定所」で判断されれば、それでタツちゃんには文句はなかったのだった。

「すまない事をした。」

その声は唐突に、大きく、しかし、タツちゃんの気持ちを気遣うような柔らかい響きとともに、高い天空の位置から響いてきた。

「グエラ様！」

誰が叫んだのかはわからなかった。でも誰かが言った。その言葉から、タツちゃんは「さっきの『すまない』と言った声がグエラ大王なのか」と思うだけだった。いったいどこにいるのだろうか？ あのカーテンの向こう側だろうか？

「私の部下達が、出過ぎた真似をしたようだ。報告は受けている。あなたのお友達の人生を我々が脅かすことなど、宇宙の法に則って、あつてはならない事だ。」

「あつてはならない事って…。」

突然、タツちゃんはとてつもない怒りが、自分の中にこみ上げて来たのを感じた。

「あつてはならないって、あつたじゃないか！ お前が責任者なら責任を取れよ。どういう事なんだよ！」

王の間全体がどよめいたのがわかった。なんだこの辺境の異星人は。「お前」という言葉が、乱暴で失礼な意味で使われているのは、意識通信ですべての種族に伝わっていた。かの慈愛の王、グエラ様に對して、これほど失礼な態度を取るとは、どういう者なのだ？ すべての宇宙種族が、タツちゃんという存在を訝しく感じていた。ほんとうにこの乱暴な辺境の種族個体が救世主候補なのか？ 怒りにふるえるタツちゃんは、救世主伝説の存在自体が問われているこのときに、あまりに似つかわしくない存在だった。

王の間にいた宇宙種族全体の強烈な反感が、意識通信を伝ってタツちゃんの意識に直接浴びせられた。そのあまりに激しい反感にタツちゃんは、大きくたじろぎ、自分がいったい何に怒って、ここまで来たのか、何を償わせるために、宇宙の大王に訴え出ているのかを忘れそうになる。だめだ。忘れちゃいけない！

「惑わされるでないぞ。」

と突然、タツちゃんの思いをなぞるように、大きな声が王の間に響いた。空中のある一点から渦巻きのような空間の歪みが現れ、そこから誰かが飛び出して来た。スエンだった。

「おう、これはこれは。スアミイの長よ、よくおいでなされた。しかし、あなたはもうすでにグウアリイレンからは脱退されたはず。何用でここに参られた。」と、アリクイ顔の右大臣が問うた。

「特別証人としての議会参加を求められたのじゃ。そのユルイスナの者の裁定があるそうだな。」と、スエンが指差した先にはうつろな目をした宙公がいた。

「宙公！」

意識通信の指示で、宙公の姿を見つけたタツちゃんは思わず叫ぶ。「タツちゃんよ。いま彼には発言権はないのじゃ。つまり意識も停止されておる。それよりそなたはそなたの事をしっかりと伝えるが良し。それこそがそなたの使命であろう。」とスエンがタツちゃんに声

をかける。宙公の意識がないってどういうこと？ また、許せない事が増えたよ。でも、スエンが僕の事を「タツちゃん」と呼んだのは初めてだなと、タツちゃんは変なところを不思議に思った。

「良いか、タツちゃんよ。日本語とは、ほぼスアミイ語なるぞ。そなたはそなたの言葉で語れば、大王殿にも通じるはずじゃ。思いの丈、語るが良いぞ。」

え、そうなんだ。とタツちゃんは思う。それなら、この理不尽で、僕の生活は無視された悔しさを、もっともっと大声で語ってやる。

「グエラだかなんだか知らないけど、どこの誰であつても、僕の友達の人生を勝手にいじるなんておかしいじゃないか！なんでそんな事が許されるんだよ。」タツちゃんは思い切り日本語で叫んだ。言葉は会議場全体に拡声された。意識通信から、会場の反応が伝わる。どうやら、会場中の7割くらいの人間には日本語が通じているらしい。言葉の分かるものが、隣にいるものに説明をしているらしく、会場がざわつき始めた。

「まさしく、その許しを出したのは私じゃ。誠に申し訳ない。土下座して謝ろう。」というグエラの声が聞こえた。

「なんで、そんなカーテンの向こうから話すんだよ！ 謝るなら、ちゃんと僕の前に出て来て話したらどうなんだよ！ 大王かなにか知らないけど、あまりに失礼じゃないか！」タツちゃんはさつきから腹が立っている理由のひとつがやっとなかったので、それを口にした。宙公の事といい、あまりに理不尽な事が多すぎて、どこから話せば良いのかタツちゃんにもよくわかっていなかった。

「いや、地球の方。大王様はちゃんとそなたの真正面におられますぞ。しかも、そなたに敬意を表して大地に膝まで付けておられるのです。だからこそ、みながそなたを無礼だと思っているのですよ。」と、銀色の肌をした宇宙人が言った。

「え？」

どういうこと？ という、タツちゃんの口癖が出るより先に、王の間の天井から、大きな大きな太い腕が二本降りおろされて、巨大な手のひらが地響きを立てて地面にぶちあたった。

「この通り、お詫び申し上げます。」

落雷のような大声が響き渡った。二本の巨大な腕の間に、この世のものとは思えない、怪物のような巨大な顔が降りて来た。

カーテンと思っていたのは、グエラ大王の王衣だったのだ。最初からグエラはそこにいた。そしていま、土下座の姿勢をとっている。ただ、巨大すぎてタツちゃんにはその姿が認識できなかったのだ。

「申し訳なかった。そなたのお友達を、遠くへ引き離してしまった事は、大宇宙のルールに反する。グウアリエレンの長としてここにお詫び申し上げる。」

と、巨大な顔が下を向いた。頭に載せている、これまた巨大な冠が落ちそうだ。

あまりに巨大な大王が、タツちゃんに向かつて土下座をしている。その事実が分かって、タツちゃんは少し落ち着いた。

「あ、謝ってもらっても、い、意味ないよ……。ぼ、僕は友達さえ返してもらえたら、それでいいんだ。みんなが自分の人生を歩けるなら、それでいいんだよ。」

「委細、承知した。そなたのご友人方の人生、責任を持って元に戻すことをお約束しよう。書記官、命令書の作成を進めよ。」

良かった、これで地球に帰れる。とタツちゃんはホッとした。が、「ただ、私からもあなたにお願いを申し上げたいのじゃ。」

と大王がなにやら付け加えはじめた。タツちゃんは、なんだかそれが気に入らなかつた。

「なんだよ。まだ何か僕に迷惑をかけようって言うの？」

と、わざとぶっきらぼうに文句を言った。

慈愛の王、という呼び名は伝え聞いていたが、どうにもタツちゃんには、この「王」の事を信用できない気持ちだったが、どうにもタツちゃんは何故なのかは自分でもよく分からないが、なんだかんだ言っても、大王の決めたことで、タツちゃんが得をしたことはほとんどないのだ。

「迷惑……。確かに迷惑かもしれない。しかし、全宇宙の星に住む人たちの命がかかっておることじゃ。すまないが、救世主候補として、新人類戦士になつてはもらえぬだろうか？」

タツちゃんがわざと無礼な言い方をしたと言うのに、グエラ大王は表情も変えずにタツちゃんに願い事を告げた。それは固い意志とも見えだが、タツちゃんにはなにやらうさんくさい態度に感じられた。

王の間の宇宙人たちからざわめきとも意識の声ともつかないどよめきがタツちゃんに伝わってきた。

「おお、さすがはグエラ大王さま。宇宙の救いの道を残してくださいさつた。」

そんな賞賛の声がほとんどだった。「慈愛の王」の名声はそこまで大きかった。

「いや、しかし、あのものはすでに新人類戦士試験に不合格だったもの。果たして救世主として覚醒するかどうか。」

逆にタツちゃんに対しては侮蔑にも近い声しかない。タツちゃんを新人類戦士にする事に対しては、期待と不安の入り交じった声が聞こえた。

「みななもの！」

と、グエラ大王が突如、王の間に轟き渡るような声で叫んだ。「でかすぎるよ、声が。」とタツちゃんは思う。こんなに近くに僕はいるのに。

「この王たる私が、みなのものにウソをついておったこと、いまここで謝らねばならない。」

「ええ？ どういうことだ？ 王たるものがウソだつて？」

王の間にいた全宇宙中の代表種族たちが、みな一様に不信な心持ちになつていた。

「『救世主は新人類戦士の中から生まれる』という予言は、私とスエン殿で作りに上げたもの、救世主になるために新人類戦士になる必要などないのじゃ。」

「なんだつて？ どういうことなんだ？」

どよめきとも意識の混乱とも言えないとまどいの空気が、その場を支配した。

「続きは私から話そうぞ。」と、スエンが後を継いだ。

「岬の物語に、もともと新人類戦士の話は一行もありはせぬ。」

もつとも「岬の物語」に通じているはずのスエンの言葉に、王の間は騒然となつた。

「しかし。救世主が現れ、宇宙の巨大なる滅を大いなる光りで打ち砕く、と言うことははっきりと書かれておった。それは間違いないこと。救世主は、『滅と対峙したとき、金色の光を放ち、恐怖のはじまりを打ち砕く』となつておるのじゃ。」

「じゃから。」と、スエンの言葉をつないでグエラが話しはじめた。「私は、宇宙のみなが、一刻も早く安心できるように、救世主を捜し出さねばならんと考えたのじゃ。その搜索活動として新人類戦士の仕組みを生み出した。そして、この搜索活動で宇宙のみなが安心できるように、岬の物語には『新たな人類から救世主は生まれる』と書かれておったことにしようと、スエン殿に頼んだのじゃ。」

スエンは深くうなずいた。

「滅は宇宙の辺縁系から、この中心部へと、確実に浸食を進めておる。このままのスピードで浸食が進めば、宇宙そのものが滅に食い尽くされるのは自明の理。宇宙の民を救うためにも、救出人員を増やす必要はあった。意識通信による救出要員の増大と、救世主候補探索とを同時に行う。そして、そのことで、『いずれ救世主は見つかるだろう』という希望を生み出し、宇宙の民、みなな明日への生きる力をつなぎたかつたのじゃ。それが新人類戦士構想だつたのじゃ。」

「おお、さすがは我らが大王、グエラ様だ。」

「やはり慈愛の王。よく考えてくださつていた。」

という賞賛の意識が王の間全体に響き渡つていた。

王を支える、左右の大臣、銀肌とアリクイ顔も「そういうことだったのか」と、驚きを隠せない様子だった。

「どうであろうか、地球の方よ。あなたはいまでも最高位の救世主候補なのじゃ。まだまだ我らの希望の星。『滅と対峙してはじめて覚醒をする』ということであれば、まだ『虚無の闇』との対峙回数が少ないだけなのかも知れぬ。意識通信による遠隔活動で、宇宙の民を救出する新人類戦士となつて働いてはもらえれば、滅と出会う回数が増え、いずれはあなたも、救世主としての力が覚醒するかも知れぬ。」

と大王はタツちゃんに提案を持ちかけた。

「おお、そういうことか！」

「それならば、岬の物語とも矛盾しない。」

「我らの希望もつながる。」

「さすがは我らがグエラ大王さまだ。」

王の間全体に喜びの意識が舞い上がった。

「なんだよ、それ。」

タツちゃんは怒りの表情とともに、そう言った。

■
7

王の間の人間のほとんどは、タツちゃんが何故怒っているのか、その理由がわからず、あつげに取りられていた。

「お前からみんな、自分のことばかりじゃないか！」

タツちゃんの声は低く静かだったが、怒りのボルテージは高く、その怒りの大きさが意識通信を通じて王の間の全員に響き渡っていた。

深く暗い海の底から、人の内奥の鼓動にまで共振してくるような、感情の波動だった。

「なんでそんなお前らを、友達を失つてまで、救わなきゃならないんだよ。」

タツちゃんには、グエラの言葉と、その周りの賞賛が自作自演のごとく薄っぺらに見えて仕方なかった。その薄っぺらさと、夢に見た滅の恐ろしさとがあまりにかみ合わない。タツちゃんの怒りは薄っぺらさと恐ろしさの間に、深く振動し始めていた。

タツちゃんの深い響きに揺り起こされたかのように、意識を奪われていた宙公もゆっくりと目を覚ました。「なぜタツちゃんが、ここに？」と宙公は理解が出来ず、あわててを近くにあつた専用端末から、意識通信の履歴参照をはじめた。

「そ、そなたのご友人方は、元通りにする。そうお約束したはず。」

と、グエラ大王はとりなすように言う。

「当たり前だろうが！ お前が洗脳の命令を出さなきゃそんな事にはならないんだよ。違うのかよ！ それなのに、友達を奪われた上に宇

宙の果てまで出かけて救命隊員になれってどういう事だよ！」

「いや、新人類戦士は、滅による災害で亡くなった者の身体に意識通信で魂を移植する手法。宇宙中のどこからでも災害地に急行でき、魂の持ち主の側も睡眠時間の一部を流用するだけなのじゃ。通信環境の良い地域なら、そなたは、ただ寝ている時間の一部を戦士としての体験に置き換えるだけじゃ。それはまるで夢を見ているのと同じ感覚。そなたに大きな負担がかかるわけではないのじゃ。だから、ほんの少しの協力を願いたいのだ。」

グエラ大王は、タツちゃんが新人類戦士の仕組みを理解していないから怒っているのだと思いい、誤解を解こうとあわてて新人類戦士の意識通信の解説をはじめた。

「だから！　なんでそんなくだらない事のために、僕が協力してやらなきゃならないんだって言うんだよ！」

タツちゃんの怒りは、もともとそんなところにはなかった。

「く、くだらないとは。宇宙の、宇宙全体の星の命がかかっておるのだ。わかってくだされ、地球の方よ。」

「うるさいよ！　何が宇宙全体の星の命だよ。お前は、僕の友達のこと、たったひとりの、たったひとつの人生さえ平気でひん曲げた大罪人じゃないか！　なんでそんな奴が宇宙全体を救えるんだよ。」

「そ、それは……。申し訳なかった。」

大王はただわびるだけだった。

「だいたい、たったひとりの人生を粗末にする奴に、元もと助かる資格なんてないんだ。どの面下げて『救世主に助けていたきたい』と言えるんだよ。助かるにも資格がいるんだ。それとも無条件に助かるとも思ってたのか！」

意識通信が伝えてくる、タツちゃんの恐ろしいほどの怒りの重さ

に、グエラはもとより、王の間の宇宙人全員が凍り付いていた。

「自分のやった事の罪の重さも反省できてないうちに、なんで先に助かりたいとかの話が出てくるんだよ！　人の人生を踏みつぶして平気な奴が、反省もせずに『助かりたい』とか思っているのかよ。グエラ、そしてここにいるお前ら、みんな同罪だぁー！」

タツちゃんは大声を張り上げながら、腕を振り、会議場全体に対して指を突きつけた。

タツちゃんが叫んだ声よりも、意識通信が伝えるタツちゃんの怒りの通底音の方がはるかに大きく、それは地響きのように会場にとどろき渡り、その響きのあまりの巨大さに宇宙人たちは意識通信のシステムが壊れたのではないかと思うほどだった。辺境の種族の、それもたった一人の意識がここまで巨大に振動するのは異例の事ではないか？　何が起こっているのかすら、彼らには理解不能だった。ただ、何か嫌な予感が、会議に参加した代表達全員の心の奥から湧いて出て

きている、という事だけが、彼らの共有認識だった。その予感、あまりに深く、あまりに大きかった。なんなのだ？ この理不尽な「予感」は？

「宇宙滅は、宇宙が死んで行く姿なんだろう？ 宇宙が死んで行くんなら、それをそのまま受け止めたらどうなんだよ。すでにお前らみんな死んだと同じなんだよ！ どうしてその事実を受け入れられないんだ！」

みなぎドキリとした。タツちゃんの言葉は、王の間の全員の心のどこか、忘れていたところにいきなり突きつけられた七首のようだった。宇宙は死ぬ。それが事実だ。誰もその事実からは逃れられない。「自分の運命も受け入れられないケツの穴の小さい野郎が、どうしてこの宇宙に生き残っていたいなどとエラそうな事が言えるんだよ。お前らは、この宇宙より偉いとも思っているのか！ 救世主になんか頼らずに、自分のケツくらい、自分で拭けよ！」

「い、言い過ぎや、タツちゃん。」

あまりに厳しく、大きいタツちゃんの怒りに、長年の知り合いであるという意識のあった宙公は、つい口走ってしまった。みな心の痛みを和らげなければ、いてもたってもいられない気分だったのだ。

「何言ってるんだよ、宙公。宙公だって、こいつらみんなのために意識まで奪われてたんじゃないか！ 宙公だって僕の大事な友達なんだよ！」と、タツちゃんが宙公に向かってそう言うと、意識通信を伝わって来るタツちゃんの怒りの波動は、より一層大きくなった。

「火に油、注いでしもたか。」と宙公は、自分の発言をしまったと思っただ。

「台風が来たら、おとなしく行きすぎるのを待ただけだよ。なんで大宇宙の摂理に逆らえるなんて思うんだよ。お前ら、宇宙を自由に操れるとも思っていたか！」

「いや、こっちの銀河では、台風はすでにコントロールできるようになってるんや。――と宙公はもう一度つつこもうとしたが、タツちゃん姿を見て「いや、」と一言発したまま次の言葉が出なかった。

「タツちゃんが光っておる。」と、その事実を言葉にしたのはスエンだった。

「金色の光が放たれておる。」誰もが、その事実を認識できるほどタツちゃんは輝きだした。

タツちゃん自身は自分が光りを放ち出している事に気づきもせず、そのまま視線をグエラ大王の方に戻した。

「いったい何が新人類戦士なんだ！ 死体の中に意識として入り込むだつて？ お前は、人の死までもオモチャにしたのか！ そこまでして、自分が王であることを誇示したのか！ 墓暴きの盗人並に最低の人間じゃないか！」

「タツちゃんの形相は光り輝きながら恐ろしい怒りの表情になっていた。」

「め、めっそうもない。」と、グエラはただ地面にはいつくばった土下座の姿勢のまま、動くことすらできなかった。何の反論もできない。タツちゃんの輝きはより一層強くなっていった。

「え？ タツちゃん、大きくなってる？」と宙公は思った。タツちゃんは、輝きながら、ゆっくりと巨大化していた。

何か、この世のものならぬ、宇宙の意志がタツちゃんの意識とひとつになりつつあった。

「私はただ、多くの命を救いたかっただけ……。」と、やっとグエラが言うと、宇宙の意志は、ただ「オロカモノ」という言葉をタツちゃんに伝えた。

「まだ言うか！ 宇宙の摂理も受け入れられないお前なんて、自分すら救っていないじゃないか。そんな奴に他人を救う事なんかできるわけがないじゃないか！ バカか、お前は！ それでもお前は大王か！」とタツちゃんは宇宙の意志とは気付かぬままに、厳しい言葉でグエラを叱りつけ、一気に巨大化のスピードを上げた。光り輝きながら、タツちゃんは大きくなり、そのサイズはグエラ大王を追い越していた。思わずグエラものけぞり、王の間の天井いっぱい広がったタツちゃんの姿を見上げていた。

■ 8

金色のタツちゃんの姿は、いまや王の間いっぱい膨れ上がっていた。王の間の壁面にあるコロシウムのような各惑星の代表席のすぐ近くまで、タツちゃんの体は迫り、押しつぶされる恐怖で多くの全ての宇宙人がみなパニックに陥っていた。我先に逃げようとする。

巨大化したタツちゃんは、グエラを見降ろし、怒りの形相で問い質した。

「お前は、宇宙の理ことわりを無視してまで、慈愛の王という自分の名誉を守るといふ罪を犯したのだ。だからこそ、僕の友達の人生を平気で無視する事が出来たんだ。それがすべての原因だ。すべての始まりだ。その、あまりの罪の重さを、自らの命で償うがいい。」

と言ったかと思うと、タツちゃんは自分よりはるかに小さくなってしまったグエラの体を、右手で掴むと、大きな雄叫びを上げた。

うごわあおおおおおおおおおおおおおおおおおおおーおーおーおー。

巨大な体からはじき出された叫びは、まさに神の号砲。大宇宙の叱

責だった。しかも意識通信による拡張で、怒りの巨大さまでが会場の全員へと一層大きく伝播され、全宇宙の全代表は、父親や母親にきつく叱られた時より、はるかに激しく萎縮していた。ひたすら恐怖だけが自分を掴んで離さない。あまりの巨大なタツちゃんの怒りの前に、逃げる事も出来ず、ただ小さくなっていくだけだった。

「ああ、我々は、なんて恥ずかしい事ばかりやってきたのだろう。自分の命を優先してきたただけだったのだ。」という恐れにも似た反省しかできなかった。

雄叫びは、いつまでも鳴りやまなかった。そして、その雄叫びとともに、タツちゃんの体はより一層輝きを増し、エネルギー体となつて、より巨大になっていった。

エネルギー体の腕に掴まれたグエラもまた、まったく動く事すらできなかつた。グエラはすでに何が起きているのか把握することすら不可能だった。

タツちゃんの巨大化は、とどまるところを知らなかった。

タツちゃんの体は王宮をすり抜け、グエランティアと呼ばれた、この星の星都をも包みこみ、まだ拡大していった。グエランティアという名はグエラの名前から取られていた。美しくも懐かしい我が都を、ここまで恐怖の気持ちで見下ろすことが起こるとはグエラには想像すらできない事だった。

しかし、タツちゃんの姿は、そのグエランティアよりもまだまだ大きくなり、グエラの住む星よりも大きくなった。

エネルギー体としてのタツちゃんの拡大スピードは大きくなるごとに速くなり、王都のあるジエンペトリ星から、その隣のキャエンペトリ、リュエンペトリなどの星々を含む、ウエンカ星系を包み込んだ。そしてそのままウエンカ星系のある銀河、ヨヴァンダ銀河の大きさまであったという間に拡大してしまった。

そこから隣の銀河系であるリョーユ銀河に到達するまでは、拡大スピードは落ちたが、いったんリョーユ銀河を包み込むと、そこからはあらゆる銀河系を猛烈なスピードで包み込み、タツちゃんの体は、爆発的に大きくなった。

タツちゃんが拡大する過程で地球も、天の川銀河も、ヨハネス三三β宙域のドンゾーもすべてを包み込んでいった。とうとうタツちゃんは、グウアライレンが支配する宇宙の端から端まで一杯に広がり尽くした。

いまや、タツちゃんの体は宇宙全体そのものだった。

「グエラよ。お前がそこまで、この宇宙という自然の在り方を無視するなら、お前に宇宙の本質が何であるかを、教えてやろう。」
すでにタツちゃんは、タツちゃんその人ではなく、宇宙の意思そのものと一体化していた。

「そこに滅はある。宇宙には始まりがあり、終わりがあるのだ。人が生まれ死んで行くように。それを自分の体で確かめるがいい。」
 タッチちゃんはエネルギー体として拡散していて、すでに姿そのものがなくなっていたが、グエラの前にエネルギーを凝集させて憤怒の形相を表し、そのタッチちゃんの顔でグエラにそう告げると、宇宙滅の発生地点であり、もつとも巨大で広範な被害を出した宇宙域、テラルーミ415εの宇宙滅、「虚無の闇の中心」に、グエラの体を押し込むように突き入れようとした。

「や、や、やめてくれ、あああああああ。」

グエラは、そのあまりの恐怖に、気を失いかけた。そして、宇宙を救う事より、何より、自分がこの宇宙滅に取り込まれる事こそ、もつとも恐れていたのだ、という事を理解した。

自分以外の人間などどうでも良かったのだ。自分だけが助かりたかったのだ。だからこそ、救世主伝説にすがりたかったし、救世主探しのために、新人類戦士の組織も着実に作っていたのだ。そんな自分の自分勝手さが、やつといま実感として分かったのだった。

その意識のわずかな変化をタッチちゃんは感じ取っていた。だがグエラへの反応は冷たかった。宇宙の意志が『オワリアルノガイノチ』と告げていたからだだった。

「いまごろ気付いても、もう、遅い。死なぬ者はおらん。みんな死ぬんだ。死ぬ。」

そういうと、タッチちゃんの右腕は、グエラを「虚無の闇の中心」に自分の腕ごと躊躇する事なく、猛スピードで突っ込んでいた。

死への恐怖と、空間の歪みにすりつけられた猛烈な体の痛みが、グエラをさいなんだ。

■ 9

永遠に続くような痛みの中で、「死にとうはない」と、私は強烈に祈った。宇宙でも最も長い寿命を誇るジエンペトリ種族の中でも、グエント歴で900歳という、私の年齢は破格に長い。それでも、まだやり残した事が、あまりに多すぎる。

多すぎる？ いや、いったい何が？ 政治的課題は確かに多かった。しかし、そんな事は「私」のやりたかった事ではないだろう。

考えてみれば、幼くして王座争いに巻き込まれ、つねに家老職の者から、提案されてきた課題を、そのまま「選ぶ」だけだったのではな
 いか？

私が本当にやりたかった事とは一体何だったのか？ 考えてみれば、滅への恐怖に取付かれて以来、滅から逃れる事を考える事はあつても、生きていく間に何をしたいのかを、自分に問い質した事が、果

たしてあったのか？ 900歳もの長き人生の中で一回でもそれはあったのか？

その答えをもっと考えたいと思った瞬間に、私の体は滅の中へと投げ込まれてしまった。もう、命はない。

しかし。

命はない、とするなら、いま、こうして考えている「私」とは、いったい誰なのだ？

あたりを見回すと、そこは滅の中だった。虚無の闇に飲み込まれたありとあらゆる人、モノ、生物、環境、すべてが、「飲み込まれた順」に、意味もなく積み重なっているようだった。すべての「世界」が、ただ積み上げられている。そこには何の秩序もない。恐怖の赴くままに、滅は世界を食い荒らし、その食われた世界が動くことも出来ずに折り重なって、この滅の中に放置されているのだった。

「滅の中は、こうなっていたのか」と妙に納得する。恐怖とは、これほどに無秩序なのだ。

生きているのではなく、死んでいるのでもなく、ただそれは放置されていた。放置させられていたのだった。

そんな「死体」が、山のように積み上げられているその中に、私もついきましたがた放り込まれたところだった。身体は動かしたくてもピクリとも動かない。自分の身体の下に見ず知らずの誰かの生ける屍があり、その上に横たわる私の上にもまた無造作に生ける屍が積み重ねられていた。そして、そのすべての生ける屍が、私を見ていた。その意識を感じる。なにやら恨みがましい目で見られていた。

「お前が怖がるから、こんな事になったんだ。」と、彼らの意識は言っていた。ひたすら「お前が悪い」と責め立ててくる。どうやら、ここでは、時間は永遠に動かないようだ。すべてのものはいまのままだ。この責め立てられる状態が延々とただ、無限に続く世界らしい。終わり無く、永遠に。ずっと責め立てられたままだ。

たまらないなと私は思う。ああ、本当に救世主さえてくれれば。あのタツちゃんという男が、救世主になるのを引き受けてくれていれば、こんな事にはならなかったのに。と悔しい気持ちがあふれてきた。

と、その時、視界の彼方から、ゆっくりと歩きながら近づいてくる人影が見えた。誰だろう？ なんだと！ あのタツちゃんという男ではないか。いまだに怒りのオーラが消えていない様子だった。

「呼んだのか？」と、その男は尋ねてきた。どうして、この時間のない空間で、この男だけが動けるのだ？ と私が不思議に思うと、タツ

「ちゃんは答えた。」

「それは、ここが夢の中だからだ。」

「え？ と、私は不思議に思う。」

「滅はお前の恐怖そのもの。それが現実化したものだ。だから救世主に救いを求めても、この悪夢は終わりはしない。救世主伝説自体がもと誰かの夢なのだ。」

「どういうことなのだ、それは。救世主伝説はウソだったのか？」

「そうだな。お前が望んだから救世主伝説はうまれた。でもな。救世主なんて、この世にはいないのさ。人が人を救えるのは、自分だけだよ。人が人を救うなんてことは、もともと出来る相談じゃなかったんだ。それはお前もわかってたはずだぞ。」

「と、その男は私に問いかける。」

「確かに、それは知っていたような気もする。」

「だいたい、このタツちゃんという男、どうして私の心まで知っているのだ？」

「簡単な話だよ。ここが『お前の』夢の中だからさ。」

「なんだって？ 夢の中なのか？ ならば、目を覚ませば現実に帰れるのか！」

「そうさ。ここはお前の夢の中の物語。だから。『お前』がしっかりと目を覚ませば、こんな生きながら死んでいるような所からは、すぐに抜け出せるのさ。」

「そうだったのか！ と私は思う。であるなら、一刻も早くグエラとして生き返らねば。」

「いや、それはできんな。」

「と、タツちゃんは言った。」

「え？」

「グエラは、お前じゃない。」

「どういうことだ？」

「夢の中の登場人物は、夢を見ている人間が生み出したうたかたの姿。タツちゃんもグエラも、夢見るお前の移し身に過ぎない。グエラが目を覚まして、グエラの悪夢が続くだけさ。」

「ど、どういうことだ？ では、どうすれば、この悪夢は終わると言うのだ。」

「目を覚ますのはグエラじゃない。目を覚まさねばならぬのは、この岬の物語、『宇宙救世主伝説タツちゃん』を読んでもる方の『お前』だ。」

「なんだって？ それはいったい誰の事なんだ。」

「いま、ページをめくっているお前のことだよ。お前、目覚めているか？ 自分を生きてるか？」

■
10

目を覚ましたとき、タツちゃんは裸で王の間の真ん中に倒れていた。ただ、タツちゃんの体の周り数十センチのところには特殊な半透明の素材で隔離壁が作られており、その素材がベッドの役割も果たしていた。意識不明のタツちゃんを、移動させることなく安静状態にしたらしい。その隔離ベッドを中心に各種の機材などが配置され、周囲は緊急の治療室として設営がなされているようだった。タツちゃんから見えない位置に治療スタツプらしき人の気配がする。

気がついて「私」は我に返り、本を読む手を止めた。目の前に、自分の生きている、しつかりとした生活があった。

え？

タツちゃんの前には、背の高さが3mはあろうかという銀肌の左大臣と、雑居ビルなみの巨体のアrikイ顔の右大臣の二人が立っていた。

「タツチャン殿。気付かれたようですね。お体は大丈夫ですかね。」と生真面目な銀肌が、しやがみこみタツちゃんの様子をうかがっていた。異星人であるがゆえ、表情はうまく読み取れなかったが、口調からタツちゃんの体調を気遣っているというのはわかった。

「あ、う、あの。」とタツちゃんは苦しげに何か言おうとした。

「なんでしようか」と左大臣がタツちゃんに顔を近づけて聞き漏らすまいと耳をそばだてた。

「タツチャン殿は…、変だからやめてください。『タツちゃん』でいいです。」とやっとタツちゃんは答えた。

☆ ☆ ☆

結果として、タツちゃんは「救世主」そのものになっていた。タツちゃん自身から金色の光りを放ち、そして実際に「滅」の大半が消滅してしまっただけだ。全宇宙が滅の消滅を喜び、まさに伝説どおりの救世主の登場にすべての種族が快哉を叫んでいる状態なのだという。

「救世主に頼るということ自体が問題なのですがね。」とアrikイ顔の右大臣は、その状況を憂いているようだった。

銀肌の左大臣ユンプは、もともと学者であるらしく、現状の出来事を単に「伝説どおり」と済ませずに、彼なりの合理的説明をはじめていた。

「いろいろ調べて分かってきたのは、滅とは宇宙虫そのものだったのだ、と言うことなんです。」

「宇宙虫？」

宇宙虫の存在を知らなかったタツちゃんは、左大臣ユンプの説明をただ聞くばかりだった。複雑な説明をまとめると、こんな話になる。

まず、時空間を越える意識通信は便利なものではあったが、宇宙虫という生物を利用してはいるがため、気付かないうちに、利用者が宇宙虫の本能的な意思を引き継いでしまうという事が見えてきたという。意識通信の利用者は無意識に、宇宙虫たちが望む種族の保存欲求に従ってしまうのだ。

結果的に全宇宙の意識通信利用者によって、宇宙虫にとってメリツトのある選択ばかりを選び取ってしまう。宇宙全体の無意識的洗脳状態が起きていたのだ。しかし、宇宙虫には知能がないゆえに、グウェアイレンの学者・技術者達にも、それが宇宙虫による洗脳とは気付かなかったのである。

「宇宙虫にとっては、通信量が増える事が、自分達の種族の繁栄につ

ながるわけです。だから、より通信量が増えるように、滅への不安をかき立てるように仕向けていたんですね。」

「そうか。だからスエンも、自分たちだけで生きていけばいいんだって気付けなかったんですね。」

「そういうことです。あなたの指摘を受けてはじめて、その選択肢に気付けたわけなのですよ。」

「でも、宇宙全体が宇宙虫に洗脳されていたことと、滅が発生したこととどう関係してるんですか？」

「幻覚なのです。」

と、後ろからアリクイ顔の右大臣が一言で言い切った。

「宇宙滅は、どうやら宇宙虫が見せていた幻覚のようだったのですよ。」と銀肌がその続きを説明した。

宇宙虫は大量に集まると、より強力な幻覚を見せることがわかった。それが明らかになったのは、事件後のグエラ大王が、タツちゃんと変わらぬ小さな姿に変身してしまっていたからだだった。これには誰もが驚いた。巨大な大王の姿は、何百年も前から宇宙虫が周りを欺くために創り出していた虚構の巨軀だったのだ。あまりの長い年月にわたる幻覚作用で、誰にもそれが幻覚であるとは気付けなかったのだ。歴代の家老たちも、次々に死に絶え、大王が巨大な体を持っている事は当たり前前の事として受け継がれて来ていたのだった。

事件の後、グエラ大王の王座を確認すると、そこには巨大な宇宙虫の巣が形成されていた。グエラ大王の巨大な体は膨大な数の宇宙虫によって形作られた仮の姿だったのである。

「グエラ大王の姿を借りた宇宙虫は、ひたすら通信量、すなわち私たちの生存エネルギーを増やすための施策を打ち出していたのです。グエラ様の知能を利用してね。虫たちにそんな知能はなかったのかも知れませんが、グエラさまに取り付くほどに通信量は増えた。グエラ様を恐怖に陥れれば、自分たちのエサが増える。そういう関係性だけに気付いたのでしよう。おそらくは本能的な動きだったと思われます。」グエラの臣下として力を発揮していた銀肌は、悔やむかのような口調で、グエラ大王と宇宙虫の不幸な共生関係を説明してくれた。

「ただ、タツちゃんだけが、宇宙虫の洗脳にかからなかった。」と言ったのはアリクイ顔だ。

「宇宙虫は、タツちゃんをどうしても意識通信の洗脳網に浸したかったのだ。『救世主』を自分の思い通りにするためにね。だからあれほど、タツちゃんを新人類戦士にしたがったのです。それだけあなたを恐れたと言うことでしよう。」

とアリクイ顔はタツちゃんの顔を覗き込みながら、宇宙虫の狡猾な、しかしそれ故単純な調略を説明した。

「もつとも恐れるべき相手を、味方の側に取り込んでしまう。はかり

ごとの初歩ですからな。」とアリクイ顔は遠くを見ながら少しため息をついた。「こんな初歩的な謀りに、まんまとだまされてしまうと。私も遅れをとったものです。」

「でも、なんで宇宙滅は、そんなに僕を恐れたの？」

「それは、あなたがすべてを暴いてしまう可能性があったからです。宇宙虫が最も恐れたのは宇宙滅が幻覚でしかないとばれる事。あなたの自分を失わない態度と、『滅亡するならすればいい』という発想は、滅の恐怖を無力化することそのものなのです。それが彼らには一番困るのですよ。」とユンプがふたたび後を続けた。

「おそらくは、あなたがあれだけの大きなエネルギー体になったのも、そのほとんどは宇宙虫だったのだらうと考えられる。あなたを意識通信のネットに無理矢理組み込もうとして、あなたの体に宇宙中の宇宙虫が食いつこうとした。その急激な動きが彼らの分泌物であるセラブンを過剰発動させて金色に輝くエネルギー体になられたのでしよう。」

「そうなんですか。でも、宇宙滅って、宇宙の一番端っこから順に、この宇宙を食い尽くしていたんでしょ？ じゃあ、滅が消えたら、その後はどうなっているんですか？」と、タツちゃんがいつもの素朴な疑問を口にした途端、

「そこです！」と、銀肌もアリクイ顔も、ともにタツちゃんの顔をまじまじと見つめて、身を乗り出してきた。

「宇宙滅が宇宙虫の幻覚であるなら、そこにはもっと広大な宇宙空間が広がっていないければならない。しかし、宇宙虫が大幅に減少したにもかかわらず、そこに越える事すらかなわぬ『宇宙の涯』が、いまだに存在しているのです。」

「え？ どういう事。」

「わかりません。宇宙滅こそ宇宙の涯、そう思っておりましたからな。これが残された大きな謎です。」とアリクイ顔が深いため息をつきながら答えた。

「しかし、左大臣のユンプ殿とも論を重ねた結果、我々は、かなり可能性の高い仮説を導きました。もしかすると、宇宙滅の拡大は、自らの意識通信をもう一度拡大し、延々ループし続けた結果の暴走だったのではないか？ という事です。」

「どういうことですか？」

「我々の通信情報を伝え、それをまた再入力して延々拡大し続けたという事です。そうですね、あなた方の知識で言うなら、スピーカーの前にマイクを持つていった時に、音が無限に拡大してしまうハウリングという現象のようなものです。」

と続きはユンプと呼ばれた銀肌が地球の文化に合わせて解説しなおしてくれた。

「スピーカーの音をマイクが拾って、キーンっと音がなる、あれですか。」

「そうです。どうやら、宇宙虫による宇宙滅というものは、意識通信をスピーカーのように宇宙中に拡声したあと、どこかで『マイク』のような入力装置に到達して無限ループを起こしていたようなのです。」

「しかし、そうであるなら、どこかにマイクがなければならぬ。宇宙空間に宇宙虫が広がっていた間は、それでも説明がつきます。宇宙全体にマイクとスピーカーが共存していたような状態だったのですから。しかし、宇宙虫がここまで滅ってしまったにも関わらず、いまだに宇宙の涯が存在しているのであれば、それは、この宇宙とは別の宇宙が経路通路として開かれ、そこで無限ループになっていると考えるしかない。」と、こんどはアリクイ顔が少し興奮気味に説明を続けた。

「それはどういう事？」

「つまり、宇宙の涯は、別の宇宙への入り口ではないか？ ということとです。」

「そうなんですか。」タツちゃんは、それが何のことだかわからず、ただうなづくだけだった。

「そこでタツちゃん、あなたにお聞きしたい事があって、我々は、ここにいるのです。」

「な、何？ 急に。」

「率直に聞きます。あなたは、巨大化した時、滅の中の様子を、見たのではないですか？」

アリクイの左大臣の目がタツちゃんの顔を覗き込んでいた。アリクイの喜怒哀楽はタツちゃんには分からなかったけれど、かなり真剣な表情であるらしい。

「滅の中？ …うーん。見た、ような気もするけど。」

「そこは、どんなところでしたか？」

「よく覚えてないですよ。でも、よくは覚えてないけど、確か、滅に食われた人が大勢いて…」

「かなりの広さを感じられたのではないですか？」

「うん。そう。それこそスアミイ星とか、そういう規模のものが無造作に投げ捨てられている感じ。かなりだっ広いというか。」

「やはり！ 間違いない！」

タツちゃんの話で、そこまで聞くと左右の両大臣は顔を見合わせて頷きあい、とても興奮した様子で、すぐに動き出した。

「いますぐ新人類戦士用の棺を用意せよ。滅内探査隊を編成する。ハーレンシー砲を備えた小型艇も用意せよ。部隊長は私が就任する。すぐ準備にかかれ。」

とアリクイ顔の右大臣が配下の者達に命令を下していた。

「どういうことですか？」とタツちゃんは銀肌の左大臣に聞いた。

「滅は終わりではなく、始まりなのだ、ということですよ。」

「なんですか？ それは。」

「宇宙滅は、このグウアリエレン宇宙の端の端、宇宙の終わるところであり、そこが終末であると捉えられていました。しかし、そうではなく、宇宙滅こそ、別次元の宇宙への入り口だったという事です。そして宇宙虫は、その別宇宙とも通じている。だからこそハウリングは起こり、その向こう側に、我々の宇宙の空間や人間が取り込まれてしまった、ということなんです。つまり、逆に言えば、我々がそこに出かけることも不可能ではない！」と銀肌の左大臣ユンプは興奮した口調で言った。

「これは、新しい大航海時代の始まりでもあるんですよ！」とユンプは、その可能性の大きさを、タツちゃんにわかりやすいように、地球の歴史になぞらえて説明した。

「そうなんですか？ それで、なんで、あの、あのアリクイみたいな人は、なんで新人類戦士を。」

「別宇宙であるなら、いまずぐ探査隊を出すべきだと我々は考えていたのです。新人類戦士ならば、もし帰還できないような危険な場所であつても、意識だけ戻ってくることは可能ですから。」

「で、でも、あの人自身が出かけるとか言っていましたよ。」

「ええ、あの方は、そっちの方が本職ですからね。」

その様子に気付いて、次々と部下に指令を出していたアリクイ顔の右大臣がタツちゃんの方に顔を戻し、こういった。

「申し遅れました。私の名前は、レイネンスルエ。大王さまの下で政務大臣を受け持ち、並行して王族警護隊上級指揮長も兼務しております。よろしければレビンとお呼びください。」

■ グランド・エピローグ

「するってえと何かい？ おいらが高梨賞をもらえたのも、タツちゃんのおかげだっちゆう言い分かいね。」

珍しくチンさんが上機嫌でタツちゃんにからんでいた。

「いや、だから、それはチンさんの実力なんだけど、大学に戻る気になるように僕が宇宙の王に頼んだって話だよ。」

酒の席にかこつけて、タツちゃんは嘘ではない、本当の事をそのまま話していた。

「いやー、よかね。よかよか。タツちゃんがこういうとんでもない冗談が言えるようになってなあ。タツちゃんも大きゆうなつたもんだい。」と、ジューン君が混ぜっ返すと、それをさえぎるように、

「でもほんと、高梨賞が取れたら、ノーベル賞も夢じゃないんですよ？ほんとにチンさんすごいじゃない。」
とヨッコがチンさんの受賞を讃えた。カウンターの向こうでヤマさんが頼んだ焼酎のロックを作っている。

「はい、どうぞ」とヤマさんに手渡す。
「おう、おおきに。でも、そのジュン君もマサさんと一緒に事業を始めるつちゆう話じゃにやあか。いったいどういつながりかいね。」
ヤマさんは焼酎を受け取りながら、ジュン君に聞いたが、ジュン君が答える前に、チンさんが、

「だからケガの功名つちゆう奴なる？マサやんは、あのままやったら精神病院から出られんとこやったからのお。」と、答えた。

「うん。まさかうちのタノガイラーが、特定脳障害に、あそこまで効くとは思わなんだけんねえ。」と、当のジュン君が解説に回る。

「そやさけえ、サイコスキヤナーで精神波が高ぶってたんが良かったんばい。α波とβ波とθ波が三叉交路変波長になるんがサイコスキヤナーの特長やけん、タノガイラーの脳内物質分泌促進機能が増幅される事になったんじやぎや。」と、すっかり体調を戻したマサさんが解説をつなげた。

「そやさけえ、サイコスキヤナーとタノガイラーの相乗作用で、かなりの精神障害が改善できる可能性が出てきたわけやしの。その論文を書いた方が、わしのノーベル賞より早いかもしれんがじゃ。なあ。」
とチンさんが言うのと、みんなが大きく笑った。

みんながバラバラになってから、2年半の時間が経っていた。チンさんが学際研究論文賞の権威、「高梨勝賞」を受賞した事をきっかけに、久しぶりにみんなが集まることになったのだった。ながらく空き店舗だった「とつくり」は、オーナーの意向で、設備ごと、そのまま残っていた。それを知っていたヨッコが「どうせなら『とつくり』でやろうよ。」と提案したのだった。まさに昔の「とつくり」そのままだった。

「けんども、チンさんの倫理統一文化論は、戦争を完全に防止するかも知れんと、山東新聞の吉沢さんがゆうとったがじゃ。来週あたり、文化面で大特集するつちゆうとったばい。注目度ではチンさんの方が上やわなあ。」と、ヤマさんが改めてチンさんの業績をたたえる。

「おお。山東新聞とも、ヤマさんはつながるとるんかいね。さすが、被害者救済の会の代表さんは違うもんじやのお。」と、チンさんは照れ隠し半分にヤマさんに突っ込む。

「そうじゃああのう。トウマ真言教が、あんな内実だったとか、わしらにはわからんかったけんなあ。ヤマさん、よう、こつちに戻って来られたのお。」

「そうがじゃ。なんや知らんけどな、あそこに入信するとき『ナカマ

「ガイル」とか心の奥で声が聞こえたんやけど、入って三ヶ月くらいたった時かの？ また声が聞こえて来てのお。それが『トックリニカエレ』やったがいの。」

「ええ？ あのトウマ真言教の秘密を暴いたの、この『とっくり』だったの？ そっちの方がおどろくわよ。」

「現場なんじゃ、現場。現場の事を知らんと秘密なんか暴けんのや。わしが高梨瀧をもらえたのも、全国を放浪したからよ。ヤマさんが『トウマの人代』を書けたんも、実際に半年近くトウマ真言教に帰依しとったからじゃ。」

「ああ、でもさ……。と、突然タツちゃんが話しに割り込んだ。」

「その『トックリニカエレ』って声も……。」

「『僕が宇宙の王に頼んだから』かいね？ いやー、まいった。そこまで言う？ ワハハハハ。」

「タツちゃんも、ほんに人間が柔らかかあなったとよね。」

「いま、なんか旅行社とか行ってたんだっけ？」

「うん。小さな会社だけどさ。」

「そっちの人、同僚？」

「あ、宙公のこと？ いや、そうじゃないんだけど、なんていうか、こことは違うどこかの、知られていない場所の事を、いろいろ一緒に調べる間柄って言うか。」

とタツちゃんは宇宙規約に反さないように口ごもった。つい自分の青いカバンの中に入れてあるシュエルテンを見てしまう。

「へえ、同業者って感じ？ そういう関係なんだ。」

「あ。あたくし、ちよっとした公的機関で監察官ばあ、やとります。タツちゃんにはその、仕事柄、いろいろお世話になつとるとですよ。」

人種的にウソのつけない宙公は、抽象的に話して、ポイントをぼかすことになんり苦労していた。

「そうなの？ タツちゃん、どんな事してんの？」

「いやー、基本は、こことは違う、いろんな文化を、どう感じるかって感想を言うだけだよ。宙公には違いが分かるように、いろいろ情報もらったり、設定してもらったりしてるんだよ。」

「まあ、持ちつ持たれつと、そういう事でござす。」

「へえー。仕事つながりか。ま、仲良くしてよね。」とヨッコがカウンターの向こうから宙公に首を傾けて可愛らしく挨拶した。

「よろしゅうお願いばあしまんど。」

タツちゃんと宙公、ヨッコの会話を、他のみんなは興味津々で聞いていた。ジュン君がおそろおそろヨッコに聞く。

「ところで、ヨッコっちゃあ、どんな案配かいね。結婚生活は。」

「いやー、子供が可愛くてねえ。いいわよー、子供は。」

ヨツコの幸せそうな発言に、チンさん、ヤマさん、マサさんは、顔を見合わせてホツとしたという表情をした。

「矢崎のうちは、お父さんもお母さんも、本当にいい人でねえ。良かったわよ結婚して。あんたたちもさっさと相手見つけて結婚しなさいよ。」

「そうやお、みんなそれぞれいろいろあったけんのお。」

「ほんでもまあ、幸せになれたから良かったと言うことにせんとのお。」

「いやー、わしらの研究もうまいこと行ったから良かったようなものの、消えてしもうた独自研究なんぞ、それこそ、雨後の竹の子のごとく、世の中には山盛り存在しとったがね。しやけんども、どんな状況になろうと、とにかく次へつなげていこうとしたものだけが、生き残っていくがじゃ。」

「そうやね。」

「こつちからあつちに行こうと思わんと、あつちには行けんでなあ。」

「そうそう。いまのままでもいいよとか、自分だけでどうにかしようとか、そんな風に思うとうまくいかんとよ。」

「あつちから見たら、こつちがあつちという事もあるからややっこしい。」

「そうやの。」

「しやけんども、ようは、あつちにいようがこつちにいようが、みんなが自分らしゆうでできてることが、羅針盤なんやわなあ。」

「おお！」

「誰、いまかっこいいこと言ったの。」

「誰でもヨカよ。ええことはええんじや。」

「そやお。誰に助けてもらおうと思っても、まず自分で自分を救わな、先には進めんのやしな。」

「ほうじゃ、ほうじゃ。救世主より先に、まず自分が頼りじやき。」

「おうよ。じぶんがじぶんでありさえすれば、誰が誰でもかまわんとじゃ。なあ。」

「ほんに、もう、誰がしやべつとんか、わからんようになってきたき。」

「わははははははは。」

大きな笑い声とともに、1988年の夜は更けていった。

宇宙救世主伝説 タツちゃん 完